

## 性癖と趣味

### —— カント哲学における趣味の政治的再定位

東京大学 中村 陽太

本稿の目的は、カント哲学における「趣味」(Geschmack)を、政治的な観点から再定位することである。その際、『世界市民的見地における普遍史の理念』等で概観された「性癖」(Hang)によって歴史が駆動されるというカントの歴史観に着目し、性癖に駆動されたままでは国家間の戦争は避けられず部分的な法状態しか実現しえないが、『判断力批判』に固有な意味での趣味を想定すれば、歴史の内部に定位しつつも世界市民的な体制が実現される可能性が拓かれるという主張を展開する。

先行研究の多くが指摘しているように『判断力批判』における趣味は、「何か美しいものであるか」を判定する基準としては現実から乖離している。しかし、このことをもってカントの主張の妥当性を限定することは適当ではない。なぜならば、『判断力批判』において趣味が要求することは、必ずしも実現されるものではなく、単に想定され得るに過ぎないとカントは述べているからである(趣味の経験的なあり方は別箇のものとして述べられている)。

では、なぜ必ずしも実現されえない要求をする趣味が重要なのであろうか。本稿は、その事情をカントの歴史観に求める。『世界市民的見地における普遍史の理念』(以下『普遍史』)において、カントは「社会の内に入り込む性癖であるが、同時に絶えず社会を分断する恐れのある全般的な抵抗と結合している性癖でもある」「非社交的社交性」(die ungesellige Gesellschaft)によって駆動される歴史観を展開する。カントによれば、この性癖に駆動されて、一方で「社会の合法的秩序」がまず形成され、「文化」が進展し、「才能」が伸ばされ、「趣味」が形成される。だが他方で、この性癖は絶えざる戦争状態を帰結し、「輝かしき悲惨」をもたらす。歴史の歩みのこの両義性は、それを駆動するのが傾向性と結合している性癖であることに由来するとカントは診断する。『判断力批判』でもこの歴史観は受け継がれるが、しかしここでは「芸術や学は[……] 感官の性癖の暴政から多くを奪い、そのことを通じて理性のみが権力を有すべき支配への準備を整える」と述べられ、性癖が支配する歴史から脱しうる可能性が示唆されている。しかも、主語が芸術や学となっているように、この可能性をもたらすのは性癖によって形成される趣味である。つまり、経験を超越したものに逃避するのではなく、あくまで歴史の内部に定位しながら戦争状態を脱せられる可能性が拓かれる。

本稿は、以上の事情を探求するために、第一節では『普遍史』『判断力批判』で展開されたカントの歴史観を、性癖と趣味の経験的なあり方に注目して検討する。第二節では『判断力批判』に固有な趣味の含意を確認し、それが政治的な観点においてもたらし得る示唆を提供する。